

イタリアにおけるドナテッロ作品の調査および教会での フィールド・ワーク

折戸 容子

人間社会環境研究科 博士前期課程1年

1. 本調査の目的

筆者は修士論文のテーマとして、イタリア・ルネサンス初期に活躍した彫刻家ドナテッロ（ドナート・ディ・バルディ、1386頃-1466）の晩年期作品（1454年以降の作品）に見られる悲劇の様式について研究している。そこで今回の調査では、作品の表現方法の面からその点について考察すべく、①ドナテッロ作品の実物を観察し、可能なものについては写真撮影を行うこと、②ドナテッロの作品を修復したことのある修復士に修復の成果および、作品と素材との関係性について話を伺うこと、を目的とし、イタリアに赴いた。

また、派遣期間中、フィレンツェのサンタ・クローチェ教会にあるアーニョロ・ガッディ作のフレスコ壁画「聖十字架物語」の調査活動を行っている、金沢大学フレスコ壁画修復センターのチームの作業に合流させていただく機会を得た。そこで、③同作品の工芸技法の研究に関する補助業務、を担当させていただいた。

本報告書では、①～③の活動内容および成果を記録する。

2. 調査日程および訪問先

2011/12/21 金沢発、ローマ着
2011/12/22 ローマ発、パドヴァ着
2011/12/23-27 サンタントニオ教会、サンタントニオ教会広場前（以上パドヴァ）およびサンタ・マリア・ダオリオーザ・ディ・フラリー教会（ヴェネチア）での写真撮影および観察
2011/12/28 パドヴァ発、フィレンツェ着
2011/12/29-2012/1/5 および 2012/1/11-13 オルサンミ

ケーレ教会壁龕、サンタ・マリア・デル・カルミネ教会ブランカッチ礼拝堂、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、同大聖堂附属美術館、サンタ・マリア・ノヴェラ教会、サン・ロレンツォ教会旧聖具室、バルジェッロ美術館、ヴェッキオ宮（以上フィレンツェ）、シエナ大聖堂、サン・ジョヴァンニ洗礼堂（以上シエナ）での写真撮影および観察

2012/1/6-10 サンタ・クローチェ教会でのフィールド・ワークおよび同教会、同教会附属美術館でのドナテッロ作品の写真撮影および観察

2012/1/9 サンタ・クローチェ教会でのフィールド・ワークおよび国立フィレンツェ修復研究所訪問

2012/1/14 フィレンツェ発、ローマ着

2012/1/15 ローマ発

2012/1/16 金沢着

3. 調査の内容および成果

①ドナテッロ作品の写真撮影および観察

今回の派遣により、計20点の写真撮影および計12点¹のドナテッロ作品の観察を行うことができた。なお、初期ルネサンスの芸術家として、ドナテッロとしばしば対比される画家マザッチョの壁画（フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェラ教会およびサンタ・マリア・デル・カルミネ教会ブランカッチ礼拝堂）も観察してきた。

¹ ミケロッツォ・ディ・バルトロメオとの共作による、フィレンツェのサン・ロレンツォ教会旧聖具室の内部装飾は、全体で1点と数えた。

表1 写真撮影ができた作品

制作時期	作品名	所在地
1408-15	福音書記者聖ヨハネ	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1411頃	聖マルコ	オルサンミケーレ聖堂壁龕
1416-18	巻物を持つ預言者	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1418-20	髭のある預言者	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1419以降	対立教皇ヨハネス23世記念墓（ミケロツォ・ディ・バルトロメオとの共作）	フィレンツェ、サン・ジョヴァンニ洗礼堂
1421	イサクの犠牲（ナンニ・ディ・バルトロとの共作）	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1423-26	預言者エレミヤ	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1423-35	預言者ハバクク	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1425	ヘロデの宴会	シエナ、サン・ジョヴァンニ洗礼堂
1426	司教ジョヴァンニ・ペッチ墓碑板	シエナ、シエナ大聖堂
1427-29	信仰	シエナ、サン・ジョヴァンニ洗礼堂
1427-30	希望	シエナ、サン・ジョヴァンニ洗礼堂
1431以前	十字架のキリスト	フィレンツェ、サンタ・クローチェ教会
1433頃	受胎告知	フィレンツェ、サンタ・クローチェ教会
1433-39	カントリーア	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1434-38	聖母戴冠	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂
1447-50頃	ガッターメラータ将軍騎馬像	パドヴァ、サンタントニオ教会広場前
1455頃	マグダラのマリア	フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館
1457以前	洗礼者聖ヨハネ	シエナ、シエナ大聖堂
1457-64頃	ユディットとホロフェルネス	フィレンツェ、ヴェッキオ宮

※晩年期作品にあたるものには網掛けを施した

表1に、写真撮影ができたドナテッロ作品の内訳、表2に、観察のみができたドナテッロ作品の内訳、表3に、ドナテッロの全作品数および晩年期作品数のそれぞれに対する調査状況を示す。

撮影した写真は修士論文の制作にあたって使用する。

②国立フィレンツェ修復研究所での聞き取り調査

筆者は2012年1月9日（月）に、国立フィレンツェ修復研究所木彫部を訪れた。そこで、サンタ・クローチェ教会所蔵のドナテッロ作の「十字架のキリスト」（1431以前。図1）の修復（2005年）を担当した修復士の一人である Peter Stiberic 氏に、②-1. 同作品の修復作業の成果、②-2. ドナテッロの作品と使用素材との関係、②-3. 現在修復中であるベネデット・ダ・マイアーノの「十字架のキリスト」の修復作業、の3点について話を伺った。通訳は金沢大学大学院教育学研

表2 観察のみができた作品

制作時期	作品名	所在地
1409	ダヴィデ	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1416頃	聖ゲオルギウス	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1416頃	聖ゲオルギウスと竜	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1421頃	マルツォッコ	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1423以前	聖ルイ	フィレンツェ、サンタ・クローチェ教会付属美術館
1428/1434-43頃	フィレンツェ、サン・ロレンツォ教会旧聖具室（ミケロツォ・ディ・バルトロメオとの共作）	フィレンツェ、サン・ロレンツォ教会旧聖具室
1430頃	ダヴィデ	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1430年代	ニッコロ・ダ・ウツァーノの胸像	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1438	洗礼者聖ヨハネ	ヴェネチア、サンタ・マリア・グオリオーザ・ディ・フラーリ聖堂
1440以前	アテュス	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1465頃	キリストの磔刑	フィレンツェ、バルジェッロ美術館
1465	説教壇（左側）	フィレンツェ、サン・ロレンツォ教会

※晩年期作品にあたるものには網掛けを施した

表3 ドナテッロの全作品数および晩年期作品数に対する調査状況

	写真撮影ができた作品数	観察のみができた作品数
ドナテッロの全作品数計50点 ⁱⁱ	20/50点	15/50点
ドナテッロの晩年期の作品数計9点 ⁱⁱⁱ	3/9点	2/9点

究科の宮下孝晴教授にお願いした。以下に、Stiberc氏から伺った話の概要を記す。

②-1. サンタ・クローチェ教会所蔵、ドナテッロ作の磔刑像の修復作業の成果

この像は直径50cmほどの木から彫られ、別の木から背中の一部や腕などが付け足されていると考えられる。

着色はおそらくドナテッロがしたものと考えられる。十字架の木目は手描きである。

この像は、腕が上下に動くように作られている（図2）。当時、教会では像を動かして、十字架降下から復活までの場面を人形劇のように再現していたらしい。このような劇に使用された作例はこの像以外にも多数あり、ドイツやイタリアに劇の脚本が残っている。これについては、ヨハネス・タオベルト氏が1969年の著作の中で指摘している（Zeitschrift des Deutschen Vereins für Kunstwissenschaft, 23.1969, p.79-121）。

この像の手首にくさびの跡があることから、手首はもともと曲がっていたが、十字架に架けるときに平らにしたのだと考えられる（図3）。また、頭部に釘の跡が見られることから、当時は茨の冠をかぶっていたと考えられる。

16世紀の宗教改革の時代に、この像を隠すため、教会内の別の礼拝堂に移すことになった。この時、像の高さを低くする必要が生じたため、ジョルジョ・ヴァザーリが十字架の上に刺さっていた捨て札を切って十字架の表面に張り付けた。

1970年代の修復で、像の頭部は顔の面と後頭部の2つに分割され、その後再び結合された。また、この時

ii 『イタリア・ルネサンスの巨匠たち 8』（ジョヴァンナ・ガエタ・ベルテラ、吉野明訳、東京書籍、1994）を参照した。

iii 同上。



図1 十字架のキリスト

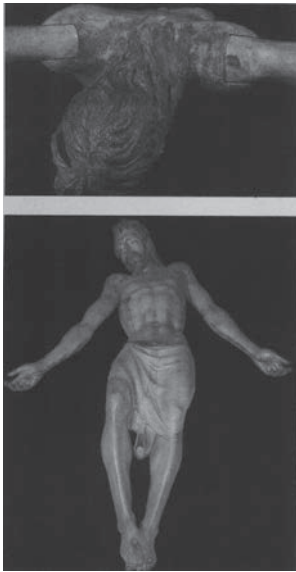


図2 腕を下ろした様子^{iv}

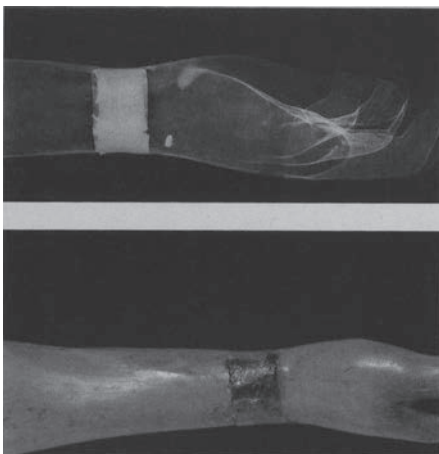


図3 手首に見られるくさびの跡^v



図4 受胎告知



図5 ダヴィデ^{vi}

の修復では、その前の修復でのリタッチが残されていたため、2005年の修復では古いリタッチを全て除去した。リタッチでは、作品のひび割れを隠すために色を塗るので、リタッチを重ねるごとにどんどん色が黒っぽくなってしまふ。そのため、古いリタッチを除去することが必要なのである。

^{iv} Peter Stiberic 氏からいただいた資料より掲載。

^v 同上。

^{vi} 『イタリア・ルネサンスの巨匠たち 8』（ジョヴァンナ・ガエタ・ベルテラ、吉野明訳、東京書籍、1994）より掲載。



図6 洗礼者聖ヨハネ^{vii}



図7 マグダラのマリア

②-2. ドナテッロの作品と使用素材との関係

サンタ・クローチェ教会所蔵の「受胎告知」(図4)は砂岩で作られているが、19世紀の修復で大理石のように白く塗られた。この修復は非難を浴びたが、ドナテッロももともとこのように白く塗っていたのだと考えられている。

ブロンズで作られている、バルジェッロ博物館の「ダヴィデ」(図5)は、頭部に多量の金を使用されていた。

^{vii} 前掲註 vi に同じ。

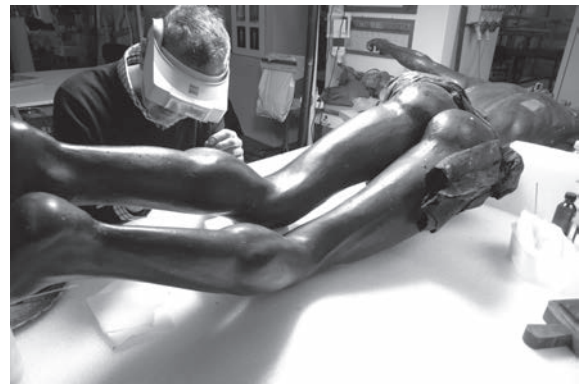


図8 ベネデット・ダ・マイアーノ作「十字架のキリスト」を修復する Peter Stiberc 氏

ブロンズという素材は、金で装飾をするための土台に過ぎなかったのだと考えられる。

木彫作品の彩色については、サンタ・マリア・グリオリーザ・ディ・フラエリ教会の「洗礼者ヨハネ」(図6)や、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂付属美術館の「マグダラのマリア」(図7)は、カラフルに塗られていた。一方、サンタ・クローチェ教会の「十字架のキリスト」は、薄い彩色で肌の色を表現している。

総じて、当時は、作品に使う素材というものはあくまでもベースなのであって、素材を生かして作品を作るということはせず、装飾に力を入れていたのだと考えられる。

②-3. ベネデット・ダ・マイアーノ作「十字架のキリスト」の修復作業

15世紀に作られたこの像は木彫の作品であったが、19世紀の手直しによってブロンズ風のモダンな作品に変えられてしまった。そこで、現在のフィレンツェ司教の提案により、15世紀らしいもとの作風に修復することとなり、現在ブロンズ風の彩色を取り除く作業をしている。図8では、作品の背中の一部の色が薄くなっているが、この部分がもとの作品の色である。

作品には穴をあけ、酸素を使って作品内部の虫を殺す。薬品は使用しない。

作品の腰布は木彫ではなく、布に膠を塗り、石膏で固めることで作られている。

③サンタ・クローチェ教会での補助業務

2012年1月6日（金）から10日（火）にかけての5日間、筆者は金沢大学フレスコ壁画修復センターのチームに合流し、フィレンツェのサンタ・クローチェ教会において補助業務を行った。

具体的には、金沢大学大学院教育学研究科の江藤望准教授の助手として、アーニョロ・ガッディ作のフレスコ壁画「聖十字架物語」を対象に、円光・金箔使用箇所・鋳使用箇所への照明の照射および写真撮影、壁画に描かれている円光の分類および大きさ・厚みの記録、ブラック・ライトの照射を担当した。

以下に筆者の活動スケジュールと成果を記録する。

<活動スケジュール>

2012/1/6

- 13:00 集合、打ち合わせ、道具搬入、照明器具の使用方法の確認、壁画見学
- 15:00 円光の分類
- 17:50 解散

2012/1/7

- 9:00 集合、作業開始（円光の分類および最終確認、円光・金箔使用箇所・鋳使用箇所への照明の照射）
- 15:00 休憩
- 16:30 作業再開
- 17:50 解散

2012/1/8

- 12:50 集合、作業開始（円光・金箔使用箇所・鋳使用箇所への照明の照射、円光の大きさ・厚みの記録、ブラック・ライトの照射）
- 17:50 解散

2012/1/9

- 9:00 集合、作業開始（円光・金箔使用箇所・鋳使用箇所へ照明を照射した様子の写真撮影）
- 14:00 フィレンツェ国立修復研究所訪問
- 16:00 サンタ・クローチェ教会で作業再開
- 17:50 解散

2012/1/10

- 9:00 集合
- 9:30 サンタ・クローチェ教会および附属美術館の見学
- 10:30 作業に合流（円光の大きさ・厚さの記録）
- 16:30 道具撤収
- 17:50 解散

<成果>

今回の活動は、筆者にとって初めてのフィールド・ワークであった。以下、使用機器やフィールド・ワークそのものから学んだことを記録する。

照明は、機動性を考慮してリュックサックに入れ、それを担いで使用する（図9）。リュックサック内部に熱がこもって燃えるのを防ぐため、排気口に接する部分は切り取ってある（図10）。

壁画に照明を照射する時は、他の照明を消灯して周囲を暗くする。そして、それぞれの箇所につき正常光（正円になるように照射する。図11）と斜光（照明を斜めから照射する。図12）の2パターンを当てて写真撮影する。斜光を当てることにより、壁画や鋳から陰影ができ、それらの凹凸が分かる。

円光の分類および大きさ・厚さの記録では図13・14のような記録用紙を使用した。円光を模様の種類と厚みの有無により分類したところ、「聖十字架物語」およびその周囲の聖人の円光には10あまりのパターンがあることが明らかになった（図15・16）。

ブラック・ライトは、蛍光物質に反応し、黄色や緑色などに光る。ブラック・ライトを使用する際も、それ以外の照明は消灯する。今回の調査では、金箔が弱い黄色、鋳が強い緑色を示した。また、金属が使用されていない箇所の壁画に、赤色を示す部分があった。

今回我々が活動した、「聖十字架物語」の足場（図17）は、一般の人々も登れるようになっている。そのため、壁画見学のツアーの人々が足場に訪れ壁画を見学している際は、その付近の作業は中断せねばならない。また、毎日18時に教会内でミサが行われるため、10分前には必ず教会を出ねばならなかった。このように、文化財の研究活動は、観光やミサに来る人々にも十分配慮して行わなければならないことを学んだ。



図9 照明器具はリュックサックの中に入れる

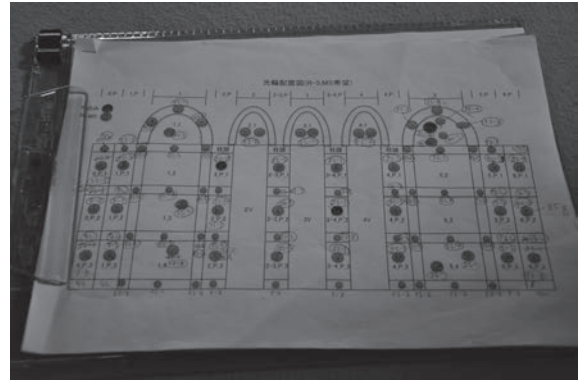


図13 円光の分類を記録した用紙



図10 排気口に接する部分を切り取ったリュックサック

NO	面番	階層	場所	名称	分類	R-5	MS	斜光	距離	下照	照度	備考
1	1	OP1上F	なし	聖人A	1							
2	1	OP1	なし	聖人A	15							下照
3	2	OP2上F	なし	聖人A	1							下照
4	2	OP2	なし	聖人A	10							下照
5	3	OP3上F	なし	聖人A	1							下照
6	3	OP3	なし	聖人A	1							下照
7	3	OP3下F	なし	聖人A	1							下照
8	1	1P1上F	なし	聖人B	15							下照
9	1	1P1	なし	聖人B	15	○	○	○	○			下照
10	2	1P2上F	なし	聖人B	1							下照
11	2	1P2	なし	聖人B	1							下照
12	3	1P3上F	なし	聖人B	1							下照
13	3	1P3	なし	聖人B	7							下照
14	3	1P3下F	なし	聖人B	1							下照
15	1	1F	なし	聖人C	21							下照
16	1	1F	なし	聖人C	21							下照
17	1	1F	なし	聖人C	21							下照
18	3	3F	なし	聖人D	1	○	○	○	○			下照

図14 円光の分類を記録した用紙



図11 正常光



図15 厚みのある円光の一例



図12 斜光

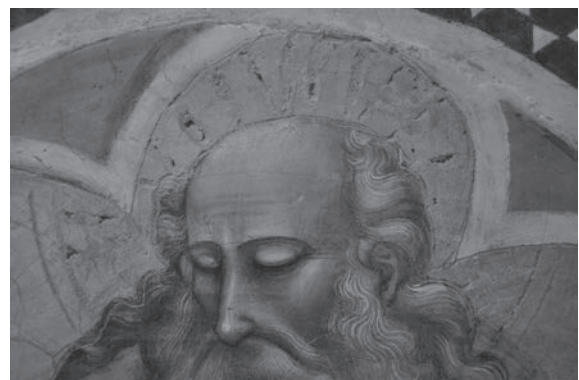
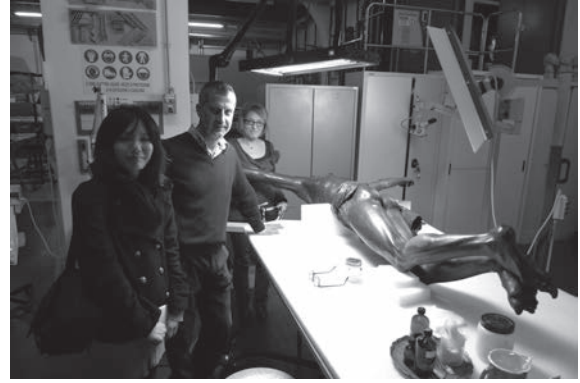


図16 厚みの無い円光の一例



図 17 壁画前に組まれた足場の一部



国立フィレンツェ修復研究所にて

4. 今後の展望

今回の派遣では、ドナテッロの作品を修復した経験のある修復士に、作品の表現と素材との関係性について話を伺えたことが大きな収穫となった。彼によれば、素材はあくまでもベースで、装飾がメインであったため、素材を活かして表現するということはしなかつただろうとのことであった。そのため、筆者が今後ドナテッロの晩年期作品の悲劇性について考察をする際には、素材よりは作品のテーマや場面などの点に重きを置くことが適切であると考えます。

また、ドナテッロ作品の写真撮影と観察においては、晩年期の代表作「マグダラのマリア」を間近に観察し、かつ写真撮影もできたため、修士論文ではおもにこの「マグダラのマリア」について論じていきたいと考えている。

今回の派遣では、ドナテッロの作品を表現技法の面から考察できたため、今後はドナテッロの作品と同時期の芸術家の作品の主題の比較や、当時のフィレンツェで流通していた文献の調査、当時のフィレンツェで起こった歴史的イベントについての調査を行っていきたいと考えている。

謝辞

今回の派遣では、国立フィレンツェ修復研究所において Peter Stiberc 氏から、ドナテッロ作品や木彫作品の修復作業に関して大変有益なお話を伺うことができた。また、金沢大学大学院教育学研究科の宮下孝晴教授には、Stiberc 氏のお話を伺うに当たって通訳をしていただき、さらに、サンタ・クローチェ教会でのフィールド・ワークに参加する機会を与えていただいた。そして、サンタ・クローチェ教会のフィールド・ワー

クにおいては、金沢大学教育学研究科の江藤望准教授をはじめとし、多くの方々にご指導をいただいた。記して心より感謝申し上げます。